

Special Essay

逃 避

臨床検査専門学校校長

石竹 達也

やるべきことが山積みするとき、逃避のようにべつのことをする、というのは誰もが心当たりがあるだろう。しかしながら、そのとき「何をする」というのは本当に千差万別なのではなかろうか。

今年の夏のロンドン五輪。私の逃避行動の一つ、スポーツ観戦にピッタリな時間となった。4年に一度だけ、そのために選手たちがひたすら努力している姿に、応援も熱くなる。メダルを取った選手の顔を見て、心がじんわりとしてきて、満たされた気持ちになった。

仕事がたまっている時の私の逃避行動、その2つめは、全くその仕事に関係ない本を読み耽る。そしてその疲れを取るために運動と称し、走るのである。その爽快感はなんとも心地良い。

3つめの逃避行動、仕事の能率を上げるためにと、机の上を整頓する。するとあんなに探していたはずの資料が出てきたりする。しかし、整頓された光景に慣れず、落ち着かなくなってしまう。

ある人が語っていたが、逃避のはずなのに、私の行動はみな生産的であるらしい。生活の何かしらに役立っているとか。しかし、私がそんな合理的に考える人間だったら、そもそも逃避などしないのかもしれない。完璧に逃避できると何かから逃避していることをすっかり忘れて、なぜそこにいるのか、なぜそれをしているのかわからないながら、何か楽しいという軽いトリップ感にひたれる。そんな自分に正当な言い訳を作り始めている。

時間ギリギリの仕事のやり方を繰り返すこと。逃避行動を繰り返すこと。人生には繰り返さないと自分のものにならない世界があり、だからこそ意図しなくても繰り返してしまうので、案外繰り返しは人間の切実な欲求ではないか。これまた、別の言い訳を考えている。

しかし、仕事だけは減ってくれない。

